

尾崎秀実における〈民族〉の位相

—— 東アジア知識人のジレンマ ——

鈴木規夫

はじめに — 尾崎秀実とは誰か

尾崎秀実（1901〔明治34〕年4月29日～1944〔昭和19〕年11月7日）は、世界的にもとても有名な日本人である。世界政治の舞台において、その名がリヒャルト・ゾルゲの名と同時に第二次世界大戦後登場したのは、まさしく冷戦の文脈においてであったからである。ゾルゲの名は、フルシチョフの時代まで当時のソ連邦では封印されていたが、むしろアメリカ側においてその諜報網の存在は高く評価され、日本占領統治にあたっていたマッカーサーも彼らが何であるのか着目していた。日本占領にあたって日本の権力構造自体の研究が求められたというばかりではなく、アメリカの権力構造にも同じような諜報網が形成されているのではないかという懸念もそこには作用していた（cf. *Venona project*）。後に「ゾルゲ＝尾崎事件」¹と呼ばれるそれは、純粋なインテリジェンスの画期となる情報戦の典型的事例というばかりでなく、そもそも内外現実政治の動きへ具体的にコミットする現象として浮上していたのだった。

一般に、尾崎秀実は「コミンテルンのスパイ」、「リヒャルト・ゾルゲ諜報団事件の一味」などとして日米開戦直前の1941年10月に逮捕された人物ということになっている。ゾルゲはナチス黨員やドイツ紙特派員に偽装して日本で組織的諜報活動を展開していたが、尾崎は偽装することはない。彼ら「ゾルゲ諜報網」の活動により、1930年代の日本は、ソ連や中国、欧米列強に対してどのような対外政策でいたのか、その錯綜した状況

も含め、ソ連ばかりでなく、ドイツにもほぼ筒抜けになっていた。1944年11月7日、ゾルゲと尾崎は共に巣鴨拘置所で処刑された。

数年前、英語圏では久方ぶりのゾルゲ＝尾崎事件研究である Owen Matthews, *An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent* (Bloomsbury, 2019) が上梓されたが、その序章冒頭でマシューズは次のように述べている。

「リヒャルト・ゾルゲは、偉大なスパイとなった一人の無法者である。かつてないまさに最も偉大なスパイの一人であった。戦前の東京に築いたスパイ・ネットワークにより、ドイツ、日本、ソ連の権力最高幹部からほんの少しだけ離れたところに、彼はいた。ゾルゲの親友で雇い主でもあり、知らず知らずのうちに情報提供者となっていた在日ドイツ大使のオイゲン・オットは、ヒトラーと定期的に話をしていて、日本におけるゾルゲ・ネットワークのトップエージェントである尾崎秀実は内閣囑託で、近衛首相と定期的に語りあっていた。モスクワのゾルゲの直属上司たちは、クレムリンでのスターリンの執務室を頻繁に訪れていた。日本がヒステリックなスパイ熱に振り回され、警察が暗号化された定期的な無線通信の発信源をつねに探っていたにもかかわらず、隠されたドイツと日本との軍事的、政治的機密を盗み出したばかりでなく、ソ連潜伏工作員として東京で約9年間も発見される事なくゾルゲは生き延びた。……ゾルゲのいた世界は、ヒトラーとスターリン、スターリンと日本軍国主義者のような天敵の間でさえも、同盟が結ばれたり破られたりするような世界なのであった。20世紀の大方のスパイとは異なり、ゾルゲのスパイ活動は、単に裏切られた諜報員や成就されなかった秘密工作の問題なのではなく、国家の運命や戦争全体の行方に恐ろしいほど直接的な影響を与えていたのであった」(Matthews2019: 1-2)。

そのような複雑さのゆえに、「ゾルゲ＝尾崎事件」についてはすでに多くの研究が存在する。しかし、この二人の死の意味を明らかにする歴史的試みは、未だその途上にある。なかなか「事件」の実相が見えにくい

は、問題位相が多角多重的でどの視座からこれを観るのかに応じて、その様相はさまざまに変化するからかもしれない。

しかしその反面、しばしば指摘されてきたように、この事件の「奇妙」なことは、非常によく記録されている（乃至は記録されているかのように見える）、ということである。1941年10月、日本当局による逮捕後、ゾルゲ諜報網のメンバーは実に多くのことを「自白」している。モスクワの上司たちから長年にわたり誤解され評価されていなかったため、ゾルゲ自身の獄中で長い自白は、自身のスパイとしての手腕やプロ意識、誠実さを自慢するかのような内容であった。彼が二重スパイである可能性を考えていたモスクワの管理者たちからは不信感を持たれてもいたが、ゾルゲは最後の最後まで、ソ連が彼を救ってくれることを望んでいた。そのため、共産主義への疑念や逃亡計画、上海の秘密の銀行口座などについては、彼は一切何も告白してはいなかった（cf. Matthews：3-4）。

とはいえ、この二人がいったい誰であったのか、その思考する実存としての在り処を探ることには、21世紀の現況と響きあう深い意義があるのではないか。その根拠のいくつかを示しておくことが、本稿の目的である。

そこでまず想起しておかなければならないのは、この「ゾルゲ諜報団」を有名にしたのは、実は彼らの死後、日本敗戦後の東西冷戦の時代であるという問題である。敗戦直後、尾崎秀実は獄死した反軍国主義の闘士として英雄となったものの、その後もいろいろな評価に晒された。そもそも尾崎についてのデータを独自には何も持たない、戦時中壊滅状況であった日本共産党も、その尾崎評価を状況に応じて二転三転させている。

また、最近ではいわゆる「ネトウヨ」がよく口にすることではあるが、敗戦直後から「ゾルゲ、尾崎は日本軍部に食い込んで、ソ連と戦争にならないよう日本を米英との戦争に誘導したのだ」、といった類の言説も夥しい。この種の言説は一種の妄想の産物であるともいえるが、この事件にそのように映る側面があることは否めない。何れにせよ、それぞれの論者により

評価は分かれるものの、様々な意味で世界と日本との岐路に重大な役割を果たした人物として、ゾルゲとともに尾崎秀実を知る人ぞ知る存在である。

アメリカの著名な政治学者チャルマーズ・ジョンソンは、ゾルゲばかりでなく尾崎秀実を主題とした単著も上梓している²。

尾崎秀実は1901年、東京市芝区伊皿子（本籍は岐阜県加茂郡白川町）にて、『報知新聞』記者尾崎秀真（白水）・きたの子として生まれた。兄尾崎秀波、弟尾崎秀東の三人兄弟である（文芸評論家尾崎秀実は異母弟）。生後すぐに父尾崎秀真（ほつま）が後藤新平の招きで『台湾日日新報』漢文部主任となり、家族ともども日本統治下台湾の台北に移り住み、秀実は台北で育った。この台湾での生育と父秀真の台湾人士との交流が、秀実へどのような影響を与えたのかについても考慮される必要がある³（これについてはまた稿を改めて論じることにする）。

父の秀真と後藤新平が知り合いであった事は、後藤がその後、初代満鉄



出所：笹本駿二『人間・尾崎秀実の回想』（岩波書店1989年）より。
前列左寄り二人目が秀真、その後ろの中央に秀実。

総裁となり、秀実の一高、東大での学費を援助したばかりでなく、大分経ってからの秀実の最後の勤務が満鉄調査部嘱託であったという意味でも、奇妙な縁で結ばれてもいる。

尾崎秀実は、台湾で後藤が植民地経営後継者育成の一環として設立した中等教育のエリート校を卒業後、東京へ出て第一高等学校、東京帝国大学法学部、さらにその大学院へ進み、東京朝日新聞社会部に記者として入社した。翌年大阪朝日新聞支那部に移り、さらにその上海支局に転勤して3年半ほど激動の上海で取材した。その間、中国共産党を含む様々な組織と繋がりを持ち、独特のネットワークを通して得られる情報に基づいた鋭い中国情勢分析でたちまち「支那通」としての頭角を表す。ゾルゲやアグネス・スメドレーなどと接触が始まったのもこの頃である。

1932年はじめに日本に戻り大阪本社外報部に転じた。この時期、ゾルゲは日本での諜報活動のため、あらためて東アジアへやってきて、再び尾崎と連絡を取り、尾崎を日本における諜報組織の重要な要員として位置づけ活動し始める。その翌年、尾崎は東京朝日新聞に新設された東亜問題調査会に勤務するようになり、1936年ヨセミテでの太平洋問題調査会に中国専門家として参加し、そこで太平洋問題調査会理事の西園寺公一と親しくなる。その年の暮れに西安事件が起こる。するとたちまち「張学良クーデターの意義」という論文を『中央公論』（1937年一月号）に発表し、その後の中国での事態の展開を見事に予測したのだった。ちなみに尾崎を『中央公論』に初めて起用した編集者は、当時編集長をつとめていた小森田一記であった（彼は戦後世界評論社を設立し、その『世界評論』創刊号（1946年2月1日発行）において、尾崎秀実の獄中書簡の一部と遺書を掲載、その後秀実と英子との書簡集に『愛情はふる星のごとく』というタイトルをつけ発刊した）。尾崎はそこで西安事件のゆくへについて自ら考えるところを展開し、毛沢東は拘束した蒋介石を殺さずに国共合作への道を歩むと予測した。その予測は的中し、尾崎は以後『中央公論』の常連執筆者となり、一躍一流中国問題専門家としての地位を獲得した。その後、近衛文麿のシンクタンク

ともいえる「昭和研究会」に参加するようになる。そして、東京朝日を辞め、近衛内閣の「内閣嘱託」となり、当時の近衛内閣の政策立案過程に少なからぬ影響を与える地位を得た。1939年6月からは満鉄調査部嘱託として東京支社に勤め、その肩書きのまま1941年10月に逮捕されたのだった。

1 〈モダン〉としてのコミュニスト

ここで強調しておかなければならないのは、尾崎がアジアの現実を捉え、「支那に於ける統一は非資本主義的な発展の方向と結びつく」として中国の共産化を想定していた事である。彼はその展望を基礎に日本の対中政策を提案していた。もちろん共産主義的展望を明示していたわけではないが、日本が軍閥などの中国国内諸勢力の中枢を軍事的に破壊し、共産中国の実現へ近づけ、同時に日本の革新を進めてアジアに一大共産主義勢力を構築しつつソ連とも連携し、アングロ・サクソン資本主義のアジア侵略に抗するのだという戦略的見通しを持っていた。その述べるところに従えば、おおよそ尾崎の世界戦略を構成する諸前提は、日本は、ドイツ、イタリアと提携し、結局イギリス、アメリカを相手に戦うに至るであろう、とするものであった。それは日本・ドイツ・イタリアとイギリス・アメリカとが世界的規模で戦う世界戦争は避けられないということを意味するが、先述したように、当時の事態は流動的であり、その不可避とみられる世界戦争をどうしたら阻止できるのかということに尾崎の世界革命が構想される。それはソ連またはコミンテルンの力を借り、それにより、中国の社会主義国家への転換を図り、そこからさらに日本自体の社会主義国家への転換を図るというものであった。

尾崎の世界革命構想は、国際（世界）→東亜→日本という順に社会主義への転換をはかるという流れであり、その目標は、「東亜諸民族の西欧帝国主義支配からの解放」に置かれることになる。だが、後に尾崎は「順逆

を誤った」ことに思い至り、「国際主義」とか「世界革命」というのは迷夢・迷妄にすぎない、このシナリオは地に足が着いていない、宙に浮いた空想にすぎない、これを信じるとは嗤うべき浅はかなことである、と深く自省することになる。

この世界革命構想の媒介項となる「東亜新秩序社会」の実現に尾崎がこだわったのは、それを世界の共産主義社会へ至る一つの過程であると位置づけていたからであるが、これについてもその後の議論は多様である。

「東亜新秩序社会」とは、日本国内の革命勢力が弱く、日本の変革は日本だけでは行いがたいので、日本を社会変革するためには、ソ連、日本ならびに中国の三民族の提携が必要とされ、この三民族の結合を中核として「東亜民族共同体」の確立をめざすというものであるが、先述のように、その目標は、日本・ソ連・中国の三民族の提携援助によって、東亜諸民族の西欧帝国主義からの解放をめざすことに置かれ、日中戦争が次第に世界戦争の様相を帯びてきたことを契機に、尾崎は「東亜新秩序社会」、いわゆる「東亜協同体」の実現が決定的に重要なものになったと確信することになる（「昭和17年2月14日、尾崎秀実司法警察官訊問調」司法警察官警部・高橋与助：『現代史資料』2：128-29）。

この尾崎の展望は、本人の「反省」にもかかわらず、歴史的に見てもそれほど現実離れしていたわけではない。イデオロギー的差異をどのように考えたらよいのか議論のあるところではあるが、あの岸信介など当時のいわゆる「革新官僚」たちの計算したプランとも重なりあうところもあり、そうした意味において、アメリカのヘゲモニー衰退と共産中国の台頭に直面している21世紀の今日において、尾崎が中国問題をどのように考え日本の将来展望を切り開こうとしたのかを再考してみる事は、実にリアルに22世紀への日本の未来を考えていくことに繋がるのだといえよう。さらに、アメリカにとっても、アメリカ自身の社会主義（社会民主主義）への再帰を根底として変化しつつある現実とも、それは大いに切り結ぶものとなるはずである。人類が資本主義システムの終わり方について真剣に考えなけ

ればならない現在、コミュニスト尾崎に光を当てる意味は実に大きい。

そもそも 20 世紀前半においてコミュニストとは誰なのか。

尾崎秀実尾崎英子に宛てて次のように書き送っている。

「私は元来単純なコンミュニストではありません。極めて政治的な考慮に立っていたので近來は殆んど民族主義者であったわけです。英米との戦争不可避と考えかつ東亜の自主解放を考えてこれを主張して来たことは皆の知る通りです。これと同時に、国際的な協調完成を理想としていたのです。誤りはこのあまりに空想的であった点にありました」(昭和十八年三月五日)。

実は、この数行に 20 世紀におけるコミュニストの諸相が端的に凝集されている。

ここで尾崎のいう「単純なコンミュニスト」とは、後にルイ・アラゴンが形象したような「共產主義的人間」⁴、すなわち、その社会的出身の如何を問わず一度ははっきりと世界を見てとってしまったがために、以後は何ものも——その一身の安泰も幸福も、この明識に及ばずと考えて、それに準じて行動する人間、いわば人間を自分自身以上に置き、自分のためには何も求めず、人間のためにはすべてを求める人であり、自分自身に関する一切を犠牲にして、万人のためにその幸福と安泰とを希求してやまぬ人……であろう。

林達夫は、これを「キリスト教世界でいえばむしろ聖者の系列に入るべき純粹型」としている⁵。歴代の教皇と聖者との間に雲泥の差があるように、この「純粹型」と「世界とそして共產主義そのものの運命を左右する共產主義者のいわば政治ボス型」との間にも雲泥の差がある。

そもそも共產主義そのものがキリスト教世界の組織原理の一つの反映に他ならないという考え方もある事をよく踏まえつつ、イスラーム世界（特にその〈ガイバ〉—「隠れイマーム」の觀念など）を含むいわゆる東洋においては、「キリスト教的共產主義」とは異なる位相がある。それは、中国に

における「共産主義的人間」をどのように考えるのかという問題とも繋がり、さらには、尾崎が中国における共産主義者のありようと自己のスタンスとの鏡像関係に何を見ていたのかへの推論も可能にするはずである。

それがなぜ 20 世紀の前半に世界に立ち現れたのかといえば、世界自体の〈同時性〉を共有することになる〈モダン〉の現出（山室信一）があったからに他ならない。「聖者の系列に入るべき純粋型」としてのコミュニストが〈大衆〉に受容された理由も、〈大衆〉自体が〈モダン〉の一環としてあったからでもある⁶。

〈モダン〉とは、明治時代から使われているが、大正末期から昭和初期にかけて大流行した語である。山室によれば、チャップリンの『モダン・タイムス』における「モダン」のように、「それは既にフォードの自動車工場から広まっていた大量生産・大量販売方式であるフォーディズムを風刺するとともに、不況と失業の恐怖にさらされながら秒毎の時間に追い立てられ管理される産業社会として、私たちが今もその直中にある高速度時代の到来を予告するものだった」（山室 2021 : i）。

「ではなぜ、それほど多くのモダン語が一挙にあふれ出たのか」と言えば、「それは人々が激動する世界で現れつつある「モダン・ライフ＝近代的生活。現代生活。文化生活。最新生活」（『新語常識辞典』1936 年）を自らの生活に取り入れようとしたからである。あるいは、その未だ実現していない、目に見ることもできない「モダン・ライフ」とは何なのかを具体的にイメージさせる手がかりとなったものが」あり、「世界で同時代的に流行している生活様式や文化」すなわち、「世界が同時性をもって動き出した一九一〇～三〇年代。モガ・モボが登場した日本では、……新奇な言葉と文化が奔流のようにあふれ出たのであった」。「その普及は和服から洋服へ、和食と洋食・中華料理へ、和式木造家屋から洋風住宅へとといった生活様式そして教養や娯楽のあり方などにおいて生じていた、日本史上の大転換を示すものでもあった」、のだ（山室 2021 : iv）。

さらには、「……資本主義化の進展に伴う社会情勢の変化を背景とし

て、……思想・運動用語が一九二〇年以降は急速に普及していった。そして、同じような社会・思想状況とそれに対応する運動が、朝鮮や台湾などの日本統治下の地域へと、モダン語とともに急速に浸透していく」(山室 2021: vi)。「コミュニスト」はそうした文脈において世界に同時的に登場していくのである。

つまり、「モダンとは、いったいどのような事態をさすのかという問題」、つまり「近代と訳されるモダン、現代と訳されるモダン——これらは「二つのモダン」は、どこが、どう違うのか。モダンとは、何らかの歴史的段階づけのための時間区分なのか、それともある特徴的事象を指し示すものなのか。／新たに生じた事象や事物に対応して、造られ、流行した新語としてのモダン語とは、社会や人間の変化をどのように映し取っていたのか。そして、その移りゆく事態の中であって、日本および日本人は、アジアや欧米などの世界の人々とどのようにつながっていったのだろうか」(山室 2021: x)と問う山室は、この〈モダン語の時代〉の世界同時性を掘り出そうとしているのだが、尾崎のような「共産主義的人間」の形成は、そうした世界同時性の時空の形成と軌を一にしているのである。

尾崎が処刑され、日本が敗戦を迎えた直後の一時期、尾崎秀実の獄中書簡は、極端に人間性が抑圧された時代にあっても「自分自身に関する一切を犠牲にして、万人のためにその幸福と安泰とを希求してやまぬ人」の声として大衆の渴望に迎えられ、それを捉えたパルタイにより「聖者」に列せられかけたことはあったが、「政治ボス型」の行き交うビューローでの権力闘争なども反映し、尾崎秀実像は様々に転変交錯することとなった。

「彼の徳に従って／彼を遇しよう」というチャルマーズ・ジョンソンは、こうした尾崎を、「彼は、コミュニスト、知識人、政治家としては、自国にとっても、生きた時代からしても、全く典型的な所はない。……尾崎は、権力構造のなかで生き、思考し、行動したが、その理想は自身のものであり、自分の生きた時代での重大な出来事を、他に頼らず自分なりに評価して、その中から行動の理念を引き出していた」、と高く評価している。

「全く典型的な所」がないとジョンソンは言うのであるが、ジョンソン自身、尾崎秀実といわゆるケンブリッジ・ファイブのキム・フィルビーとの「いかなる意味でも正統のコミュニストなどではない」類似性を認めている。世界の同時性が一方でさまざまな「典型」を生み出していった〈モダン〉の時代は、それ自体同時に、「全く典型的な所」がない性格を持つコミュニストの出現を可能にした。

マシューズによれば、こうしたコミュニストの性格はゾルゲとキム・フィルビーとも共通している。

「イギリスのジャーナリスト、マレー・セイルは、ゾルゲと、彼が1967年にモスクワでインタビューしたもう一人の偉大なソ連のスパイ、キム・フィルビーとの間にある、顕著な類似性を指摘している。世代は違えども、フィルビーとゾルゲは「精神的には双子」であり、我々は〈情報収集人種〉*Homo undercoverus* と呼びうる希少種の二つの教科書的な事例を見る——私たちの残余の部分は、単に、生きている価値もなく、退屈な、機密扱いを受けることのない生活を送っているだけなのである。この二人の類似性是不気味である。二人とも、故郷から遠く離れた場所へ巡回するような両親のもとに生まれた……二人とも、特権的な教育を受け、少なくとも外見上は、それぞれ上流階級になるほどと思われるような典型となった……二人とも、若き知識人の間に共産主義が流行していた時期であった学生時代にそれに感銘を受け、共産主義者になった……。それぞれの事例で決定的な影響を与えたのは戦争であった」とセイルは記している（Matthews 2019：17）。

ここでセイルがあげている「精神的双子」の「類似性」は、ゾルゲと尾崎との間にも指摘されて然るべきであろう。セイルがゾルゲとキムとの類似性を見出し、ジョンソンがキムと尾崎との類似性を見出すことにより、ゾルゲと尾崎もまた「精神的双子」であることが確認できるのである。

尾崎も、東京で生まれたとはいえ、台湾という「故郷から遠く離れた場所へ巡回するような両親」のもとで育ち、後藤新平が植民地統治の一環として英国のパブリック・スクールを模して設立した（その意味でも後藤は大

英帝国の統治の担い手がどこで生育されていたのを、当時正確に認識していたのだとも言える)、「特権的な教育を受け、少なくとも外見上は、それぞれ上流階級になるほどと思われるような典型」となり、在学中に第一次共産党検挙事件、農民運動者検挙事件、甘粕事件などが起こり、刺激を受け、社会主義への道に英雄主義的な使命を感じるようになり、大学卒業後も高等文官試験に失敗したからとはいえ、そのまま大学院に進学して、大森善太郎経済学部教授によるブハーリン「史的唯物論」研究会に参加し、共産主義研究に没頭して共産主義者となった尾崎もまた、「若き知識人の間に共産主義が流行していた時期であった学生時代にそれに感銘を受け、共産主義者になった」のであった。

尾崎がゾルゲとやや異なるのは「戦争」体験であろうが、これは尾崎同様曖昧な「戦間期」を生きたキム・フィルビーとは近い。いずれにせよ、ゾルゲやキム・フィルビーもまた「単純なコミュニスト」でも「正統のコミュニスト」などではないのである。ジョンソンがセイルの指摘に示唆されたのかどうかは定かではないが、尾崎をこのゾルゲ、フィルビー二人と同じカテゴリーに入れていることは理にかなっている。

むろん、この三人だけが特異な存在なのではなく、中国の潘漢年、袁殊なども含め、単純でも正統でもないコミュニストたちは〈モダン〉において世界同時多発的に生まれ、存在した。ここで肝心なのはそうしたコミュニストを醸成した〈モダン〉の性格に他ならない。

一種の国際主義が、帝国主義化するネーション・ステイトの時代に、そのカウンターとして、ネーションを越えて万国のプロレタリアートの団結を訴える思想の世界化が導き出されていたのであるとすると、それはまた同時に、ネーションを民族や人種に凝集させ再燃させる動きをも内包することになる。

2 アジアにおける擬制としての〈民族〉

〈モダン〉の現出としてのコミュニストたちは、世界における同時性から次第にずれていく「戦争の世紀」のナショナリズムの時代に、どう対処したのか。

先に引用したように、尾崎の場合、より自覚的に、「極めて政治的な考慮に立っていたので近來は殆んど民族主義者」であって、「英米との戦争不可避と考えかつ東亜の自主解放を考えてこれを主張」していくと同時に、「国際的な協調完成を理想としていた」という、ある種のジレンマに陥る。そのジレンマは、非西洋世界において帝国主義的世界支配の軛に晒されているといったん自覚した後に、そこから如何に解放されていくべきかを考える知識人にとっては避けることのできないものであった。

逆に西洋世界にあって世界革命を志向する思考にとっても、それは同様である。万国の労働者が団結し、世界中で帝国主義の軛を解き放ったとしても、その後の世界秩序の構想がなければ、たちまち既存のネイション・ステイト・システムに取り込まれ再編されてしまう。

加えて、19世紀にマルクスとエンゲルスが万国の労働者の団結を唱えたまさにその時は、ヨーロッパにおける〈民族〉乃至〈国民〉の構築期であった。「西洋の衝撃」以降激しい植民地化過程の中にあった非西洋諸地域は、しかし、外圧により人間集団のアイデンティティ変容を強いられながら、生き残るためにネイション・ステイト・システムへうまく組み込まれていくことによって、結果として新たな〈民族〉乃至〈国民〉を構築せざるをえない状況に晒される20世紀を迎えることになった。

たとえば、〈日本人〉などいなかったところに〈日本人〉が構築された〈日本〉の20世紀は、〈中国人〉などいなかったところへ〈中国人〉を構築せざるをえなくなった〈中国〉の21世紀と合い重なっていくことになる。

こうした混淆した状況は、とりわけインテリジェンスにおけるロイヤリティをめぐる局面でも鮮明になる。ゾルゲや尾崎をいわゆる「スパイ」と

表現するところに刺さる違和感は、このロイヤリティをめぐる問題と交錯することになるのである。

尾崎の「スパイ活動」は単なるスパイアクション映画のようなそれとはまったく異なったものであったことは言うまでもない。個々の情報を蒐集しても、それを統合して一定の戦略に結びつけていかないと意味がない。尾崎本人は、これをインテリジェンスという概念で考えているわけではないが、当時世界中でこうした情報戦に伴うさまざまな革新が劇的に進んでいたことと、尾崎の活動は相即していた。それは、尾崎個人の調査と思考とによるばかりでなく、当時の満鉄調査部のようなシンクタンクの調査分析とも連動したものとなっていた。

有名などころでは、尾崎たちの実施した「支那抗戦力調査」(1939～1940) などがあるが、インテリジェンスの基本となるのは、ヒューミントやシギントなどにより蒐集された情報に科学的データ解析を行い、一定のシミュレーション（こうした概念も当時は未だ未成熟であったとはいえ）の下に戦略的思考の基礎とする方法論の活用である。「支那抗戦力調査」は、結局、軍首脳や政府首脳に受け入れられる事もなく、日本の戦略自体を大きく変える事はできなかったが、こうした調査分析に有力な働きを示したのは、マルクス主義的方法論を身につけた知識人たちであったことは留意されてよい。数字の意味を解説できる想像力は、当時のマルクス主義の洗礼を受けた人士でなければ持ち得なかった。

ゾルゲは尾崎を「私の最初でまた最も重要な提携者である」としているが、1928年の上海到着以来、尾崎は、上海における日本の外交・経済界、国民党当局との間に、比べるものない人脈を築いてきたばかりでなく、密かに中国共産党とも関係を深めていた。尾崎の主な情報源の一つは、近衛公が日中理解のため上海に設立した大学、東亜同文書院であり（興味深いことに尾崎の上海での活動期と近衛文麿が東亜同文書院の院長であった時期はぴったり重なっている）、中国左派系の若者が集まり、国民党政府幹部になった

卒業生も多かった。尾崎はまた、中国共産党支配の内陸部の苦況を伝えるスメドレーの共産党シンパサークルでもよく話をし、また、南京政府親日派とも頻繁に接触していた。こうしたフィールドワークは、尾崎の情報収集と分析の能力を飛躍的に高めていた。

尾崎の活動が情報の収集分析に留まらなかったことも着目しておくべきところであろう。ゾルゲ諜報網の最終段階における情報分析判断の過程においても、尾崎のそうしたセンスが発揮された。

ゾルゲの獄中記によれば、近衛内閣全体の流れに沿いつつ、尾崎はヒトラーにソ連を攻撃するような巨大なリスクを冒す意欲があるのかについては常に懐疑的だった。「尾崎自身、日本がロシアに戦争を仕掛けるなどとんでもないことであるという意見であった」。したがって、バルバロッサの現実には彼に大きな衝撃を与え、同時に危険を察知できなかったという個人的な罪悪感も抱いた。世界革命の母国が危機に瀕している今、尾崎は単なる観察者ではなく行為者になる時が来たと判断したようである(Matthews2019: 291)。

情報は力であることをゾルゲも尾崎もよく理解しており、二人ともそれぞれのやり方で陰から政治的舞台に立つことを長い間夢見ていたので、1939年時点において、尾崎はゾルゲに、中国問題の専門家として社会的に大きな説得力を持ち、有力者と政治的に接触していることを利用し、有力者の友人たちをより親ソの立場に誘導できないか、と提案していた。当時、あからさまなロビー活動をすれば諜報員としての立場が危うくなることを恐れ、ゾルゲはこの提案を拒否したが、1941年6月下旬になると、慎重であるべき時期はすでに過ぎていたとして、近衛グループの「ロシアに対する態度はかなり柔軟」であり、「私の政治的操作を可能にするいくつかの根拠があった」、と尾崎はゾルゲに報告する。そしてさらに、ゾルゲが以前から尾崎に、ロシアについては徹底した中立を保つように言っていたことが功を奏し、近衛首相は尾崎の公平さを「かなり高く評価し」、尾崎の助言を求めさえした。「これは、日本が対露戦争に参加すべき

かどうかという現在の重要な問題について、まさに尾崎が自分の意見を明らかにするチャンスであった」、とゾルゲは尋問官に語っている。モスクワには、「積極的な政治活動を行う可能性があることを伝え、それを行うべきかどうかを尋ねる」手紙を出していた (Matthews2019 : 292)。

バルバロッサの撤退の悲惨な知らせが殺到し、さらに緊急事態に対処しなければならなかったモスクワのセンターは、ゾルゲ諜報網の積極的介入策を特に拒否しなかったが、そうする必要はないとの答えであった、とゾルゲは後に書いている。これは尾崎にとって十分なゴーサインであった。

尾崎によれば、朝食会の早朝会合で日本のソ連への軍事的冒険に反対するよう強く主張するのに時間はかからなかった。ソ連が日本を脅かすことはない、と尾崎は6月25日、近衛の内輪の助言者側近たちに語った。シベリアには、ゴム、石油、錫など、日本が戦争に必要な天然資源がまったくなかった。防衛戦争に長けた敵とのシベリアでの冬の戦争は、血生臭く厳しいものになるであろう。尾崎は二年前のノモンハンでのソ連の予想外に有能であることを力説した。ロシアとの戦争も無意味だ、なぜなら、日本の経済的優位は北ではなく南にあるからである——大東亜共栄圏の初期の設計者の一人であった尾崎は、このことをよく知っているはずであった。さらに、日露間の紛争は米英の思うつぼである。「石油と鉄を使い果たした日本を攻撃する可能性が高いからだ、と結論づけた。さらに、ドイツがソ連を破ることに成功すれば、日本は指一本触れずにシベリアを手に入れることができるかもしれない」、と述べていた (Matthews2019 : 292)。

平和主義者で国際共産主義者である尾崎は、ソ連を守るために東南アジアにおける日本帝国の運命を熱心に促していた。このことをどのように評価するのか、議論も分かれるところであるが、尾崎自身の思考回路においてはそこに一貫した論理があったことは言うまでもない。

朝食会での議論は、日本帝国の命運をどこへ導くのかという解釈の問題をめぐって活発であった。バルバロッサ作戦はドイツ軍が西部戦線で戦っている間にロシアの一部を占領する天与の機会だと考える人々も多くあ

り、かくして日本は、歴史的な北方の敵を排除することができ、北東アジアからヨーロッパ人を永遠に追い出すことにより、日本人がアジアの支配者であることを確認することができるのだというわけである。これに対して尾崎は、「私の見解に強く反対されてゐたのでそれに反発する気分が非常に多分に動いて居た結果であつたことが主たる動機でした」と、後に自分の主張が自分より劣ると見なす人々によって否定されたことへの憤りにより、熱くなったことを認めている。スターリンにとって幸いだったのは、尾崎の見解の方が、説得力があつたことである。「ロシアに勝つのは非常に難しい」、「シベリアで生き残れるのはロシア人だけだ、日本人には寒すぎる」というのが内閣顧問の結論となつていった。

むろん、朝食会を説得することは、近衛本人を説得することとは違う。この10年間、関東軍と陸軍省が文民政府の決定を何度も覆したことで証明されているように、近衛といえども軍事問題における日本の最高権力者ではなかつた。しかし、尾崎の発言は首相のソ連侵攻への懐疑心を煽る上で重要であつた。その年の5月には、尾崎はゾルゲに、「近衛が英米との戦争かロシアとの戦争かどちらかを選ばなければならないとしたら、むしろロシアとの戦争を選ぶだろう、彼はロシアが嫌いだから」、と伝えていた(Matthews2019: 293)。

6月19日及び23日、日本陸海軍最高司令官たちは、対ソ政策を決定するための重要な極秘会議を開いた。宮城と尾崎は、尾崎の友人でオックスフォード大学出身の西園寺公一と朝日新聞社政経部長の田中慎次郎との会話から、共同して数日のうちにその要点を集めていた。上司の家を定期的に訪れるようになった尾崎は、本質的に現在の日本の立場は熟した柿の実が自然に落ちるのを待つように、気長にその時機の到来を待つ「熟柿主義」なのである、とゾルゲに言った。つまり、陸海軍はヒトラーがソビエトに勝つまで、三国同盟も日ソ中立条約も守って様子を見ることにした。その時、日本はナチスがシベリアを要求するのを阻止するために介入する。この柵越し作戦は、ゾルゲがモスクワに報告したように、「将来の国

際情勢の変化に対応した南北統一作戦……」という大げさな名目で行われた。一方、日本の軍部指導者たちは、東南アジアへの進出計画を継続することで合意した——他方では、オットが自信を持って予想していたように、ソ連軍が三カ月以内に制圧された場合、ロシアへの侵攻の可能性に備えたのだった（Matthews2019：293-94）。

尾崎の供述とゾルゲの獄中記とによって構成される、むしろ情報を作り出していく尾崎の「実践」により実際の国策がどのように動いたのかを判定することはむろん難しいが、少なくとも尾崎自身は、この時期「民族主義者」として振る舞いながら「コミュニスト」としての信条と矛盾することなく、顧問としてギリギリの対応をしていたのであろうことは確かである。

同じ頃、英国ではステーション X (*Station X*) と呼ばれたブレッチリー・パークでアラン・チューリングなどが暗号解読システムの開発に従事していたように、情報の解読を科学的組織的に行うという方法は、世界中で展開されていた。尾崎自身は、暗号解読などには関わっていたわけではない。だが、単に暗号を解読するだけではなくさらにそれを如何にして政策決定過程に組み込むのかという事に腐心していた。そうしたインテリジェンスの活用は、当時画期的な発想であった。現代世界においては、世界中のインテリジェンス・コミュニティが、ただ単に国益のために情報収集するというばかりでなく、グローバルな課題の方向性を調整し合うという具合に動いていることはよく知られている。彼らもまた、国家を超えた目標を持ち始めているのだともいえる。

先述のジョンソンは、自身も東アジア地域の CIA 分析官であった事から尾崎に興味を持った。だがそれはまた、成功したスパイ活動はまったく痕跡を残さないのが普通であるので、インテリジェンス活動の当事者が自身についての情報も含め記録に残っている事例は極めて珍しいからでもあった。尾崎＝ゾルゲ事件については、『現代史資料 ゾルゲ事件』（みすず書房）が、そうした基礎資料として残されたので、これまで様々に研究

されてきた。近年では『太田耐造関係文書』⁷が公開され、その原資料の状態をよりよく知る事が可能になってきた。

そこには「思想検事」という、ある意味では日本における「カウンター・インテリジェンスの核」が何を考えていたのかという問題も含め、多様な視角を再考できる条件が新たに生じている。彼ら「思想検事」たちもまた、彼らの守るべき「日本」及び「日本人」が何であるのかを自らに問うような状況に、当時あったのである。太田耐造も所属していた、「忠君愛国の精神」へのファシズムの統合・一体化を実現するために設立されたとされる、「日本法理研究会」の基層には柳田國男研究があったことにも、それは端的に現れていた。

さらにいえば、置かれた諸条件は大分異なるが、尾崎の時代の「中国問題」と現代的「中国問題」とは、一種の対照性を示している。中共が現在進めている〈一带一路〉構想は、かつての日本の〈大東亜共栄圏〉構想ではないのか（故に危険である）、という議論があり、現代の中共中央に、尾崎のような構想力を持ってこの〈一带一路〉構想を展開している人々が果たしているのか、そうした問いと重ね合わせながら、尾崎の〈東亜協同体〉理念の再評価を試みつつ、覇権自壊のアメリカと中国を主軸とする平和的な世界新秩序への移行をめぐる考察する必要がある。

3 ユーラシアにおける〈愛国〉の矛盾

「極めて政治的な考慮に立っていたので近來は殆んど民族主義者であったわけです」、という尾崎は、同時に自らを〈愛国者〉と呼ぶことに躊躇はなかった。世界主義者たるコミュニストとであると同時に〈愛国者〉であることは如何に可能なのか。かつてのソ連に求められた〈愛国〉には、ロシアへのそればかりではなく、インターナショナリズムが自動的に上書きされる思考システムを保ち、世界の「労働者の祖国」ソ連を〈愛国〉の対象とするというロジックが機能していた。

『人間主義の反乱』の著者キリル・メドベージェフの論考「人民がいなければ、左翼もいない：下からの愛国主義」によれば⁸、1980年代はソ連のさまざまな時代のイデオロギーの流れが蓄積され、かなり折衷的な図式が出来上がっていた時代であり、学校においては、戦争、階級闘争、蜂起、革命といった輝かしい歴史だけでなく、イタリア統一、第二次世界大戦、レジスタンス、アフリカやアジアの人々の反植民地闘争、キューバ革命などにたいして「愛国者」という言葉がポジティブな意味を持つことも学んだのだという。彼はまた、「ロシアは誰も攻撃していない」という情けなくも有名な概念を学校で学んだが、おそらくそれは1930年代と1940年代における国家愛国主義の転回に遡ることができるだろうとしている。旧帝国主義の遺物、マルクス主義の古典が教条的なまでに染みついた、中央集権は分断よりも進歩的であり、労働者階級には多くの言語よりも共通語が望ましいという考え、対立する陣営という冷戦時代の思考の根強さなど、多くの要因が「ソ連の愛国者」をウクライナへのロシア連邦の侵略を支持させた、というのである。

こうした「ソ連愛国主義」の生成は、社会主義がそもそも国境を超えた理念の共有を前提としてきたことに要因がある以上、「ロシア」により収束される諸要素から予め逸脱するはずなのであるが、ブーチン政権の「ロシア愛国主義」と次第に重なり合うような事態が生じざるをえない一種の「両義性」へ至る必然性がある。「グローバル資本の進展による国境開放の約束にもかかわらず、私たちは世界中で、国家に対する新たな要求だけでなく、国境と「固有の」領土をめぐる血なまぐさい争いを目の当たりにしている」というキリル・メドベージェフは、国民国家の論理に巻き込まれることなく、超国家的な連邦や連合体の思想でもってこの状況から逃れる可能性はあるだろうか、と問う。他方で、プロレタリアートと反ファシズムというソヴィエト由来のアイデンティティに再び回収されてしまうことを疑うのである。

こうした「ソ連愛国主義」の両義的な性格を半世紀以上実験検証した結

果、ついにソ連自体が崩壊してさらに後に、ロシア愛国主義のソ連と二重移しになったアイデンティティの問題は、それが始まった「1930年代と1940年代における国家愛国主義の転回」以来未だに解決してはいないことになる。

では、「殆んど民族主義者」であった尾崎の場合はどうであろう。

尾崎における「東亜協同体」、「東亜新秩序」への展望は、先述したように、調書の次のような箇所に集約されている。「申すまでもなく東亜新秩序社会は当然世界新秩序社会の一環をなすべきものでありますから、世界新秩序完成の方向と東亜新秩序の形態とが相矛盾するものであってはならないことは当然であります。／なお日本における社会体制の転換に際してとるべき手段の予想は、日本社会の旧支配体制の急激な崩壊にさいして急速にプロレタリアートを基礎とした党を整備強化し、単独にまたは他の連繫し得る党派との連合のもとにプロレタリアートの独裁を目ざして闘争を展開して行くべきものと考えます。現在日本のプロレタリアートの抱えるべき日本共産党は、ほとんど潰滅の状態にあるのに鑑み、この予想には相当の困難を伴うのでありますが、これには国内の他の友党との共同戦線の構築と、国際的友好勢力特にソ連邦の党の援助によって、そのさい急速に党の拡大強化を計る可能性が考えられるわけで、この党を中核として社会変革を遂行し得ると考えられるのであります。」(cf. 太田耐造関係文書)。

そして、様々に混交した「大東亜共栄論」や「東亜協同体論」と尾崎のそれとの決定的相違は、「日本社会の旧支配体制の急激な崩壊」が前提となっている所である。そこには、アングロ・サクソンの世界秩序⁹に対抗する秩序形成の必然性を説く所において、イデオロギー基盤の明確なポスト資本主義システムへのビジョン、すなわち〈世界革命への展望〉が理念としてはあったものの、その資本主義を支えている主権国家システムが、いかに解体されうののかについて、十分に現実的なそのオールタナティブの提示と実践的プログラムが不足していた。

「誤りはこのあまりに空想的であった点に」あったと、本人も自覚して

いたのはまさにそこであった。つまり、戦後ソ連と同じような、〈民族〉とそれを超えた新たな世界秩序構築との両義性や矛盾に陥る可能性は、理論的にも〈未完のプロジェクト〉であるということなのである。

現代中国が、「中国式現代化で中華民族の偉大な復興を全面的に推進」していくことと、「人類運命共同体」との両義性を、対立を対立のまま統一する弁証法的展開に委ねるのには、尾崎の時代よりなおさらに難しいままであることは言うまでもない。

〈一帯一路〉構想という形で提示されるその近未来のビジョンには、世界秩序や規範に関する理論的整備が完成しているわけではない。それがまさに様々な憶測と懸念と、漠然とした不安に基づく敵対的感情などを惹起させている。その典型的な反応は、「八紘一宇の天皇制の日本軍国主義の侵略的軍事展開」と相似た「大中華圏」への野望である云々とするものであることもよく知られている。

むすびに —— 新たな〈完璧な人間〉への道

尾崎秀実とは時代〈モダン〉の典型であると同時に少し早過ぎた未来であった。

本稿では、〈モダン〉の過去に封じ込められた尾崎とは異なる、21世紀に記憶されるべき新たなコミュニスト尾崎秀実の輪郭を提示し、この新たな「転形期における主体形成の意義」を考えてきた。

かつて、クルト・ジンガーやウィンストン・チャーチルは、ソ連スパイと他の国々のスパイとの相違は、共産主義の側では共産主義ユートピア実現のためには自分の祖国さえも犠牲にするという事が、恰も宗教的信念と言える程にあるという一点であるとして、その彼らにとっての「危険な特異性」を指摘している。そのように彼らが考えるのは、ナショナリズム自体がこの地上にもたらしたある種のディストピアの反映に他ならないからである。「ケンブリッジ・ファイヴ」のメンバー、ガイ・バージェスを

モデルにした舞台劇（それを原作とした映画もまた）*Another Country* というタイトルそのものが端的に表象するように、尾崎たちの、この地上の「愛国」を超えた異なる次元の故郷を見出す魂は、かつてE.W. サイドが指摘したように、聖ヴィクトル・フーゴの「故郷を甘美に思う者はまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかんりの力をたくわえた者である。だが、全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である」、という精神的超然性と寛容を象徴するアフォリズムを想起させずにはおかない。

その出所は、おそらくはさらに遡り、イブン・スィーナーの「空中人間」、さらには〈完璧なる人間〉概念¹⁰へも至るのであろうが、偏狭なナショナリズムからも逃れ、ディストピアへ迷い込まないためにも、尾崎たち「複雑な」コミュニストのユートピアへの道を再び探るべきなのではないかという問題提起を、本稿は慎ましく残したいのである。

*本稿は2022年12月15～17日韓国にて開催された第16回東アジア実学国際学会会議における報告「尾崎秀実における〈民族〉の位相」をもとに加筆されたものである。

註

- 1 取り敢えず、近年における研究諸成果を踏まえたこの「事件」の概略については、加藤哲郎『ゾルゲ事件―覆された神話』（平凡社新書2014年）、Owen Matthews, *An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent* (Bloomsbury, 2019) 等参照。また、尾崎の「訊問調」については、基本的に『現代史資料』（みすず書房、1962年）および『ゾルゲ事件史料集成―太田耐造関係文書』（不二出版、2019年）に拠った。
- 2 Chalmers Johnson, *An instance of treason : Ozaki Hotsumi and the Sorge spy ring*, Stanford University Press, 1990 [チャルマーズ・ジョンソン（篠崎務訳）『ゾルゲ事件とは何か』（岩波現代文庫、2013年）]。
- 3 尾崎秀真「秀実の生い立ち」『回想の尾崎秀実』（尾崎秀樹編、勁草書房、1979年）参照。

- 4 ルイ・アラゴン『共産主義的人間』（後藤達雄、那須国男訳、青銅社、1953年）
- 5 林達夫『共産主義的人間』（中央公論新社、1973年）参照。
- 6 山室信一『モダン語の世界へー流行語で探る近現代』（岩波新書、2021年）参照。
- 7 太田耐造関係文書は以下のサイトにおいても参照できる。（<https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/jp/ootataizou.html>）
- 8 Kirill Medvedev, "If There Is No People, There Is No Left either": Progressive History and Patriotism from Below,
https://posle.media/language/en/if-there-is-no-people-there-is-no-left-either-progressive-history-and-patriotism-from-below/?fbclid=IwAR3lyjQ65obnNp3pwfHrI2yycrafsm4yHYqnYl24lazQ2yscyYySJzQv_mc
- 9 「アングロ・サクソンの世界秩序」もまた一種の幻想であるとする議論は、新渡戸稲造「民族優勢説の危険」（https://www.aozora.gr.jp/cards/000718/files/50897_41261.html）を参照。
- 10 Cf. 「私には次のことがわかりました。人間は時々、「自己でない自己」と誤解して、「自己でない自己」を「自己」と考えます。自己でない自己を自己と考えるので、自分の考えては「自己」のために従っていることが、実は「自己でない自己」のために行っているのです。そして、真の自己を放棄し、分離し（*mahjūr*）、時に廃棄すらしてしまうのです。」（cf. 嶋本隆光「イスラームにおける「自己を知ること（*ma'rifat an-nafs*）」 — M. モタッハリーの完全な人間（*ensān-e kāmel*）論 —」『一神教学際研究 4』）および、鎌田繁。「イスラーム神秘哲学における魂」『慶應大学言語文化研究所紀要』No.53（2022.3）。